
BABELL!!

カタツムリフミオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BABELL!!

【Nコード】

N1348I

【作者名】

カタツムリフミオ

【あらすじ】

ファンタジー小説です。

エリーゼという女の子が、世界の危機を救うために、伝説の大魔法使いバベルを呼びに行く、という物語です。

BABEL!!

名波 密乃

今日も雲行きが怪しい。

ここアパローゼの町にも昨日、まるで季節はずれの雪がちらついた。窓から、荒れる風をエリーゼが見ている。

外ではエリーゼの父が畑の作物を風から守るため、必死に覆いをかけていた。

木のドアが開き、中年の男がかけこんでくる。

「おじさん。どうしたの？ ひどい風ね。」

「ああ、全くだ。帽子が飛ばされちまったよ。」

男が赤毛の髪を整えながら応える。

「エリーゼ、長おさが呼んでる。」

「長様が？」

「なんでも、お前に頼みたいことがあるそうだ。」

「なにかしら。行ってくるわね。」

外に出ると、強い風が吹きつける。

遠くの田園におじさんの帽子が飛ばされているのが見えた。

「お父さん！ 長様の所に行ってくるわ！」

風にかきけされそうに声を飛ばす。

父親が手をあげる。

レンガのゆるやかな坂道を歩く。

アパローゼの町は丘の上にある。

広がる田園の向こうに風車が音をたてて回っている。

道の反対側から、長いパンを入れた袋を持ったおばさんがフードを押さえながら歩いてきた。

「エリーゼ！どこ行くんだい！？」

「長様が呼んでるらしいの！」

「そうかい！しかしこの頃の天気には困るね！どうしたんだろううね！」

「本当ね！いろんな所でおかしくなってるらしいわね！」

「ああ！こんなじゃ今年の麦はどうなるのかねえ！気をつけて行っ
てきな！」

長の家は一番の高台にある。

庭で犬がしっぽをふっている。

「久しぶりね。」

裏手には山羊に似た長いカーキ色の毛のマリュという家畜が何頭か
草を食^はんでいた。

「長様。エリーゼです。」

ノックする。

「お入り。」

壁ぎわの伝声管から長の声。

深い赤色のカーペットの通路をそろそろと歩き、応接間のドアを開
く。

応接間も同じ深い赤にコーディネートされて、低いテーブルの向こ
うに長が座っていた。

長は小柄な銀髪のおばあさんだ。
瞳の色は片方ずつ違^ひう。

青と緑の瞳がエリーゼを見る。

「久しぶりだね。」

笑って、エリーゼに座るよう手で示す。

「お久しぶりです。お元気そうですねによりです。」

エリーゼは腰を下ろす。

「悪いね。わざわざ来てもらって。」

「いえ。私に何かお話があるとか。」

長の瞳は刻々とゆるやかに色が変わっていく。

緑から黄、青からピンク。

「この頃天気の様子がおかしいだろう？」

「そうですね。今日もすごい風です。」

部屋には窓が無い。

壁の棚や天井に多様な不思議な道具がかけられている。

くちばしの大きいカラスの剥製はくせいの横に、よく見ると本物の生きている猫が座ってエリーゼを見ていた。

目が合うと猫は目を閉じて柔らかく鳴く。

長の飼い猫のタレスだ。

もう何年生きているのか、エリーゼが生まれた時から成猫だった。

「様子がおかしいのはここだけじゃない。」

この世界で大きな変化が生じようとしてるのだよ。」

「変化？」

「それが何なのか、具体的には分からないが……いいことじやあない。」

近ごろ、私の魔力まりよくも揺らいでいてね。

どうも魔力に関係しているようだ。

エリーゼ、お前はなんともないかい？」

「今のところは……別に変わったところはありません。」

「そうかい。……占ったのだが……」

長はテーブルの下から紫水晶でできた花を出して前に置く。

「私と思うよりずっと大きな、深刻なものらしい。」

エリーゼ……お前に頼みがあるのだよ。」

長が紫水晶の花に手をかざすと、中にボンヤリと光が浮かぶ。

「はい。」

「バベルという魔道士を探して、連れて来てほしいのだよ。」

「バベル？バベルって……あの伝説の大魔法使いの？」

「そう。……もう伝説になって、行方も知らないが、まだこの世界にいるはずだ。」

「でも……探しても来てくれるかしら。バベルってなんでも・

・性格が悪かったらしいじゃありませんか。」

「・・・・私も一度、私が幼かった頃に会ったことがあるが、そんな人ではないよ。」

「・・・・でも、どうして私なんですか？」

「占いで出たのだよ。何度占っても、闇の中に光る鍵はバベル。そして、それを呼べるのはエリーゼ。お前だと。」

「私が・・・・。」

「できるね？」

考えるエリーゼ。

「やってみます。」

エリーゼは決心の顔でうなずく。

長はほほ笑む。

「でも、どこをどこから探せばいいでしょう。」

「そうだね・・・・・・占ってみよう。」

水晶の花に長は息を吹きかけ、上に茜色あかねの粉をふりまく。

まぶたを閉じて両手を結んで花の上に置く。

まぶたの上に瞳の色が映る。

めまぐるしく色とりどりの光が移り変わる。

水晶の花はそれに呼応するように光の泡が現れては消える。

めったに見られない長の魔力の光景を目のあたりにしてエリーゼは興奮していた。

タレスは身じろぎもしない。

徐々に光が落ち着き、もとの薄暗さに戻る。

「イルパヴの街に行きなさい。」

その港から・・・・・・お前の着いた時、最初に出る船を見送って、2番目に出る船に乗りなさい。

そうすれば道が明るくなる。」

記憶に刻みこんでエリーゼはうなずく。

「気をつけて。幸福を祈ってるよ。」

明日の朝、発ちなさい。丘のふもとは風が止んでるから。」

「はい。」

「お父さんとお母さんに心配かけさせてすまないと伝えておいておくれ。」

「ええ。行ってきます。」

その日の夕食。

父と母と兄とエリーゼがテーブルについている。

「長の言うことなら、お前に間違いはないんだろう。どうだ、怖いか。」

父がパンをちぎってシチューにつけて言う。

「少しね。けど、こんなこと初めてで、遠くまで行くのも……。風のせいかしら、なんだかワクワクする。」

「勇ましいね。」

兄がシチューをすすって言う。

「確かに魔力に恵まれたエリーゼが適任だね。」

「けど心配だわ。」

母がシチューをすくうスプーンを止めて言う。

「エリーゼ、くれぐれも危険なことはしないように。魔獣まじゅうもこの頃現れてるらしいから、できれば街にいなさい。」

「街にバベルがいるかな。いたらとっくに見つかってるさ。」

兄が口をはさむ。

「確かにそうだな。」

自家製のビールを飲みながら笑う父を母がにらむ。

「気をつけてね。誰か一緒なら……。」

「大丈夫。ただの人探しよ。長様の言っていた通りに行ってチャッチャッと帰ってくるわ。イルパヴの街よ。船の旅よ。素敵だわー。」
ウツトリとするエリーゼ。

「イルパヴかー。あそこは酒がうまい。」

「バベルに変なことされないように!」

母が語気を上げる。

「バベルっていえば最後の大魔法使いだろ？今も生きてるのかーすごいなー。ミイラみたいなじいさんだったりして。」

兄が笑う。

夕食を終えて早々に自分の部屋に入り旅の準備をする。

窓から景色を眺める。

この景色ともしばらくお別れね。

ノックの音。

応えると兄がドアを開けた。

「これ。」

兄の差し出したものはナイフだった。

柄と鞘えさやにキラキラと光る石がちりばめられている。

兄が大切にしている宝物だ。

「なに？」

「かしてやる。失くすなよ。」

「いらないよ。」

「んなことないよ。冒険に行くんだろ？」

「じゃあ一応もらっとく。」

「返せよ。何かいい土産買ってきてくれよ。バベルの魔法の道具とか。あー欲しいなー。」

兄は一人で盛り上がりドアを閉める。

兄のナイフをカバンに入れる。

他には少しの食料とライト、服をつめる。

朝、家の前にエリーゼと大勢の見送りがいる。

風は昨日よりはおとなしい。

エリーゼはお気に入りの春色のボレロを着ておめかしをしている。

「じゃあ行つてきます。」

「エリーゼ、これ持って行きなさい。」

母がドライフラワーでできたお守りを渡す。

「エリーゼちゃん、これ飲んで行きな。」

酒飲みのおじさんが搾りたてのマリユのミルクを渡す。
それを飲み干さないうちにいるいろな物や言葉がエリーゼに渡される。

お腹がいっぱいになってやっとねぎらいも静まり、手を振って歩き出す。

子供たちが途中までついてくる。

丘のふもとまで来ると風がなくなっていた。

エリーゼは手の平を開いて前に向ける。

目を閉じて精神を集中する。

水色の光がエリーゼを包み、髪の毛とボレロが揺れる。

一瞬、透明な羽がエリーゼの背中でキラリと輝き、エリーゼの体がフワリと浮く。

そのまま高く高く宙に舞い、丘を見下ろすほどにまで来る。さつき見送った人達が歓声を上げて手を振る。

「気をつけてなー。」

小さく父の声が聞こえる。

手を振って飛び出す。

気流は乱れているが、魔力で風の影響は軽くできる。

空を飛ぶと、近くが遠くに、遠くが近くに見えて不思議。

梢がざわめく。

ちよっとおかしい。

長様の言っていた通り、魔力が少し揺らいでる気がする。

なだらかな丘陵が続く。

イルパヴの街は^{だいせいこ}大清湖を抜けてもずっとずっと先だ。

見たことのない鳥の群れが飛んでいた。

大清湖が見えてきた。

青く澄んだ湖面にさざ波の光が溶けている。

その上を通っていると、急に強い雨が降ってきた。

「キャッ。」

エリーゼは大きくバランスを崩す。

どうしたの！？魔力が出ない！

湖に急降下する。

あんなに穏やかだった湖面は、無数の見えない鳥につつかれているように波紋が暴れている。

「キヤー！」

湖に大きな波しぶきが上がる。

銀色の小魚を見たのを最後にエリーゼの意識はとだえた。

エリーゼの目が覚めると、花模様の天井が見えた。

「気がつきましたね。どこか痛い所はありませんか？」

見ると横に桜色の服を着た看護婦がエリーゼをほほ笑んで見ていた。
「私、どうしたの……？」

「湖に落ちたのよ。それを見た釣り人が助けてくれてここまで運ばれたの。」

だんだん思い出してきた。

雨に打たれて落ちてしまったんだ。

きつと気が動転したんだ……。

「ここはどこですか？」

「リモーネよ。」

「リモーネ……。」

リモーネはアパローゼとイルパヴの中間にある大きな街だ。

「今……私どれくらい……？」

「あなた丸一日眠ってたのよ。今はお昼過ぎ。何か食べる？」

「えっ！」

丸一日？どうしてそんなに眠ってしまったのかしら！

「大変だわ。急がないと。私、もう大丈夫みたいです。お世話になりました。」

「そう？じゃあ退院の手続きをするわ。少し待っててね。」

看護婦が出ていく。

ベッドから窓の外を見るエリーゼ。

リモーネって始めてだわ……。

街行く人はみんなおシャレでカッコいい……。

町並みもなんてキレイなの。

カラフルな屋根の家々、見下ろす市場では色鮮やかな果物がパッチワークのように並べられていた。

道にはめこまれたタイルがピカツと日光をはねかえす。

エリーゼの髪はグシャグシャだ。

カバンは大丈夫かしら。

ドアが開いて看護婦がカゴを抱えて入ってきた。

中にはエリーゼの服とカバンが入っている。

「服はお洗濯してもう乾いてますよ。バッグは浮いて中は無事みたいよ。よかったわね。」

ああよかった。

軽い草の糸で編まれてるせいだ。

母にもらったドライフラワーのお守りも幸い無事だった。

一日分の入院費を払うと、エリーゼの財布は船賃とあと少しの生活費だけの頼りない額になってしまった。

しかたない、こんな素敵な街だけど簡単な食事だけしてイルパヴに向かいましょ。

螺旋階段を下りて、街に出るとそこは今まで見たことのない華やか、めくるめく世界。

窓から眺めるよりずっと生き生きとして活気あふれる街だった。

人々の髪からは果物の香り。

宝石で有名な街だけあり、そこかしこにきらびやかな宝石店やアクセサリー、壁や道にも小さな宝石がキラめいている。

市場から賑やかな声がりズムをとって、大清湖から獲れたばかりの淡水魚を山盛りにして運ぶ青年が前を駆けて行く。

一日何も食べてないので、エリーゼのお腹はもうペコペコだ。

市場の屋台で荒塩が焦げた魚の串焼きと、果汁したたる名前も知らない大きな甘酸っぱい果実にむしゃぶりついて、手頃な食堂を探し

歩いていると、エリーゼはまだどこことなく体の調子がおかしいことに気付く。

体の中に食べ物じゃなく何かが足りないような感じだ。

どうしたのかしら、風邪？

風っていえば、あの時、本当に急に魔力がぬけてしまったような気がした。

まさか……。

静かに血の気がひいていく。

まさかね。

心配を打ち消そうと、エリーゼは街を少しはずれて誰もいない裏路地に入った。

精神を集中して魔力を呼び起こす。

水色の薄い光の粒子がフラフラと浮き上がるだけで、いつまで経っても体が浮かない。

本格的に血の気がひいて、冷や汗が額をつたった。

そんな……どうして……。

それから何度も何度も試したが同じことだった。

夕食時の街のレストランにエリーゼがポツンと一人でテーブルに就いていた。

テーブルの上にはフルーツジュース、細長いステーキが何本かジュシーな音をたてて、冷製の魚の乗った小皿の Pasta が美しく盛りつけられている。

いつもなら無我夢中で食いついてしまうごちそうも、今は小さなのどを通らないようだ。

どうしたらいいのかしら。

空を飛べないのなら、イルパヴの街は遠すぎる。

かといって、アパローゼの町に帰るのも同じくらい遠い。

フルーツジュースを飲むと、酸っぱさに歯をくいしばって、急に心細くなった。

どうしてこんなことに……。
もう何回も自問した気持ちだった。

原因は分からなくても、現実に関、私は魔法が使えないんだ。
それなら、町に帰って他の人に代わっても時間の無駄じゃない。
せつかくここまで来たのだから。

やってみよう。列車に乗れば……………

「あ！」

お金が無いんだ。

列車賃を払ったら船賃が足りなくなる。

帰るしかないか……………

カバンを開く。

お母さんからもらったお守りを見なくなったからだ。

カバンの中でお守りの横の兄から借りたナイフがキラキラ光っていた。
た。

これは確か遠い所から来た親戚の人が兄にくれたものだった。

かなり高そうだ……………

売ったらいくらになるんだろう……………

いけない、そんなこと考えたら。

列車賃くらいにはなるかしら……………

エリーゼの足は宝石店に向いていた。

とりあえず下取りしてみよう。

売る気はないわ。

兄の宝物だもの。

色とりどりの星のような粒が光る扉を開ける。

ショウウィンドーにはエリーゼの頭ほどもある宝石が飾られていた。
店の奥に夢の中のようなたくさんの宝石が並ぶカウンターを挟んで、
大柄な主人がモノクルをかけて虹色の石を覗いていた。

「あの、すみません。これ下取りしたらいくらになるでしょう？」

エリーゼはこの宝石に比べたら控えめに見えるナイフを差し出す。

「どれどれ……………」

虹色の石をフワフワした台にのせてから、主人はナイフを受けとる。しばらく主人は鞘を抜いたり、ためつすがめつしげしげと確かめながら言った。

「650クレシだね。」

「650!？」

650クレシといったら、列車賃と船賃を合わせても、まだお釣りがくる大金だ。

「そうですか……。」

沈んでしまったエリーゼの様子を見て店の主人が聞く。

「どうしたんだい？足りない？」

「いえ……。」

エリーゼは事状を簡単に説明した。

大事な用があつて遠くまで行かねばならない道中で、どうしてもお金が足らなくなつてしまい、このナイフは兄から借りた大切なものだ。

「そうか……。」

親身な主人は首をひねる。

「それなら、これは僕が一時預かつて、代わりにお金を君に渡したらどうか？」

君が戻ってくるのはいつぐらい？」

「多分……、1月以内には。」

「それじゃあ、多めに見て2月、必ず僕が大切に保管しておくよ。お金は利息なしで返してくれば、このナイフは君のもとに戻る。どうだい？」

「……お願いします。」

650クレシを握りしめて、高架下にエリーゼは立っていた。きつと、必ず返すわ。

バベルに会ったら、バベルだって鬼じゃないもの、大魔法使いなんだし、はるばる来た女の子におこづかいくらいくれるかも。

無理矢理、樂觀的に考える。

行ってみたい。

自分に任せられたこの不思議な旅をここで終わらせたくない。
無謀かも知れないけど、がんばってみよう。

上を列車が走る度に、チラホラと色の粒が舞い落ちてくる。

伸びやかな歌が遠くから響く。

「グズグズしてはいられない……。いつぱい眠っちゃったから。」

駅で切符を買う。

夜行列車だ。

列車に乗るのも初めてで、しかも夜行なんて。

それだけでワクワクが戻ってきた。

ホームで、大きな木製のカバンを持った若い婦人が恋人と別れを惜しんでいるのを見ると、列車が汽笛を鳴らして停まった。

「イルパヴ行き。イルパヴ行きー。」

トパーズ色の列車。

半月型の窓から緑色の淡い光が溢れて、中は広い個室に分かれていた。

列車の下には川のように色が流れている。

カバンを柔らかいベッドに置いて、窓際の椅子に座って外の景色を見つめる。

列車が火花を散らし、動き出した。

街の灯りがユラユラと移ろい、何も無い暗闇になった。

黒い窓には決意にひきしまったエリーゼの顔が映る。

月が動かずについてくる。

少し前からずっと満月だ。

ベッドに飛びのり、靴下を脱ぐ。

柔らかいマットからほんのりと花の香りが漂う。

明日はお昼ごろにイルパヴに着いて、それから船乗り場に行って、2番目の船をたしかめて……………。

どこに行くのかな、それからどうしようか。

ウトウトと考えていると、まぶたは溶けて眠りの底が見える。
丸一日眠ったのに、エリーゼは熟睡した。

小鳥がさわぐ声で、エリーゼは起きあがる。
朝だ。

カーテンを開けると、窓ごしに黄色い木々が薄い葉を揺らしている。
列車の速度はゆるやかだ。

部屋を出て、食堂に行ってみた。

空いていた。この列車の乗客は少ないようだ。

背もたれの高い椅子に座って見回すと、昨夜駅で恋人と別れをおし
んでいた婦人がコーヒーを飲んでいた。

黒い細身のドレスを着ている。

目が合うと軽くほほえみかけてくれた。

「ご注文はお決まりですか？」

たつぷり白いヒゲをたくわえたボーイが聞く。

「えーと、モーニングカフェセットお願いします。」

「かしこまりました。」

外は爽やかに晴れていた。

今どの辺なのかな。

「よろしい？」

声をかけられて、向くとさっきの婦人がエリーゼの向かいの席を指
さしていた。

「え、ええどうぞ。」

「ありがとう。話し相手が欲しかったの。お一人でご旅行なの？」

「旅行っていうか、ちよつと用事があつて。」

「へーご用。面白そうね。」

婦人は肘についてニコニコ笑っている。

恋人と別れていた時はあんなに泣いていたのに……。

今は陽を受けて眩しいほどだ。

「私はパテラ。よろしく。」

「エリーゼです。」

「私はイルパヴで船に乗って家に帰るんだけど、あなたはイルパヴにご用があるの？」

「いいえ、私も船に乗るんです。どこに行くかは分からないんだけど……。」

「行き先がわからない船に乗るの？えー、ますます面白そうね。よかったら教えて欲しいなー。」

パテラのキラキラ輝く瞳に見つめられて、エリーゼは説明せざるをえなくなった。

人に話したい気持ちも有ったし……。

「なるほど。それはすごい事ね。」

エリーゼの話にパテラは驚いていた。

「バベルねー。もはや伝説だもの……。この世界に大きな変化が起こりそうつても、確かにそうかもしれないわね。

めったに現れない大獣たいじゅうもちよくちよく目撃されてるって聞くし、何よりお天気がおかしいもの。」

パテラは納得したようにうなずいている。

「だから、船に乗った後どうしようか、……。魔力も出なくなっちゃったし。」

「そうね。今の時代、魔法らしい魔法を使える人も少ないから、信用できる占い師を探すのも骨が折れることね。」

うーんと2人は首をひねる。

パテラはエリーゼのモーニングカフェセットから、赤い小さなフルーッツを無断でつまみ食う。

エリーゼはメープルパンケーキをほおばる。

「とりあえず船が出てるかどうかね。」

パテラがエリーゼのフルーッツジュースを上品に飲んで言った。

「イルパヴもお天気が狂ってるみたいなのね。だから、もしかしたら出てないかもしれないわよ。」

「そうだったらもつと困るわ。」

長様は2つめの船に乗ったら道が明るくなるっておっしゃってたし・
・・・・・。

「そうよね。」

また2人はうーんとうなり出した。

考えるのをやめて、パテラとカードゲームをしているうちに、
「イルパヴ。イルパヴー。」
と駅に着いた。

パテラは木製のカバンを重そうにホームに下ろす。

カバンには車輪がついていて、軽やかな音を立てて滑り出す。

「まずは波止場で確認しましょ。」

駅から出ると外は一面雪景色だった。

「わー。」

「何コレ!？」

歩く人は皆慣れない足取りだ。

「イルパヴにこんなに雪が積もるなんて・・・しかもこの時期に・
・・ますますもって船が心配ね。」

波止場に行くまでに、氷になった道でパテラは3回、エリーゼは2
回滑ってしりもちをついた。

「船は予定通り出てるよ。海の方は穏やかなもんだから。」
筋骨たくましい男が応対する。

「今から2番目に出る船はどこ行きですか？」

「2番目? えーと、・・・・・アサノハだね。」

「あら、私と一緒に!」

パテラが声をあげる。

2人は目を見合わせて笑う。

船の時間にはまだあるので、昼食をとり、街に向かう。
リモーネの街とはまた違って、味のある街だ。

潮風が自由な気分させる。

雪も塩辛そうな感じだ。

「ここ、ここ。この魚料理はすごいのよ!」

パテラはイルパヴには何回か来ていて、けっこう詳しかった。店の中では船員達が酒を飲んで笑っていた。

港の見える広い窓のテーブルについて料理を注文する。

店員はやけに大声で応える。

港も雪がかぶさって、荷の上を船員たちが雪かきしていた。

「へい、おまち!」

ドンと置かれた皿の上には、生きたままの大魚がおとなしく横たわっていた。

皮はむかれ、豊かな白身がむき出しにされている。

魚は誇らしげに笑ってるようにも見えた。

「すごいでしょ!？」

「生きてる!・・・どうやって食べるの・・・。」

「見ててみ。」

パテラが大魚にフォークを近づけると、魚はフォークを凝視する。

次の瞬間、体に力を入れて、一口大の身が勢いよく飛び出した。

その身はパテラのフォークに突き刺さった。

穴のあいた大魚は息も荒く、思いきり白目をむいて恍惚の表情だ。

エリーゼは驚嘆して声も出ない。

「驚いたでしょ!この魚はね、自分で自分の身を飛ばして食べさせてくれるの!しかも生きてるから新鮮よ!。」

パテラは刺さった身を口に入れて頬をほころばす。

エリーゼもフォークを近づけると、同じように身が飛び出し刺さる。

魚はまたも恍惚の表情を浮かべる。

食べると、まるで口に大海が広がってゆくような豪快かつ繊細な味。踊るようになどをすり抜けていく。

「おいしい!」

2人はあきることなく、はしゃいで食べ続けた。

最後の身を飛ばすと、魚は大きく身を震わせて息絶えた。

「これを煮てお雑炊にするんだけど、これがまたおいしいの。」

雪の港で、エリーゼとパテラは船を待っていた。

羽の広い鳥が輪を描いて飛び交っている。

まもなく、透明な船が、豪華な客室を露わに陽の光を反射して、近づいて着岸した。

「アサノハ行きの船が出るぞー!!」

パテラとは隣の部屋だ。

片手をあげて別れた後、自分の客室に入る。

一瞬、広い部屋が海に浮かんでいる感覚になった。

海に面した壁は全面窓。

「わー。」

水平線はずっと、海と空を分け続けているのかしら。

家族がいたら何て言うかな。

パテラと会えて、楽しくなってきた。

部屋のお風呂を見てみる。

隣のパテラの部屋からもかすかに水の音がする。

お湯を張った湯船に、香草をいくつも入れて何ともお姫様にでもなった気分だ。

アサノハに着いても何とかなるわ。

体が熱くなり、楽天的に笑った。

穏やかな海を眺めながら着がえをすまして、ジュースを飲んでいると、ノックの音がしてパテラの声がした。

「テラスに行きましょう。」

パテラも、今度はルビー色とスカーレットのドレスに着替えて、つばの広い薄い帽子をかぶっていた。

同じ香草の香りがしている。

テラスに上がると、潮風に髪がなびく。

波の音が遠くに響きわたる。

「空を飛べるようになったら、私も連れてって。」
「うん。」

パテラが風にはためく帽子をおさえて、遠くの緑を見つめる。
恋人のことを思っているのだろうか。

その時、船の近くの海上に巨大なものが現れた。

最初は大きな岩かと思ったが、首が波しぶきを上げて出てきた。

「大獣だわ！キヤー珍しい！」

パテラが表情を一転させて叫ぶ。

現れたのは、小さな島ほどもあるカメだった。

ボーツと太く鳴く。

テラスにいた他の客も端に集まり驚きはしゃぐ。

「皆さま、右手の海に現れたのはコウミという大獣です。」

アナウンスが楽しげに話し出した。

「小さな海ほどもあるのでこの名前がつけました。

100年に1度しか姿を現さないといわれ、我々船員も実際に見たのはこれが初めてです。

危害を加えないおとなしい性質なのでご心配ありません。

コウミを見た者には、とんでもない幸福か、とんでもない不幸が舞い降りるといわれています。

皆さまには幸福が訪れますよう、船員一同、心よりお祈り申し上げます。
「」

コウミはさわぐ船を気にもかけず、日光浴をしているようだ。

甲羅の上で海鳥が何かついばんでいる。

だんだんと遠ざかっていく。

夜の船内の料理もまた豪華だった。

静かにゆるやかに音楽が流れる。

「また明日ね。」

「また明日。」

パテラと別れて部屋に戻る。

夜の海は黒に眠り、星空が歌っていた。

朝日がカーテン越しにさしこみ、部屋の中を照らす。
髪を整えていると腹が鳴った。

美味しいものばかり食べてるからお腹が甘えてるわ。

パテラの部屋をノックすると、寝呆けたパテラが出てきた。

「おはよう。」

テラスで朝食を食べた。

日の光が暖かい。

パテラは今日は薄緑色のふんわりしたパンツスタイルだった。

パテラが着がえている間にエリーゼはパテラの服を何着か進呈して
もらえてホクホクしている。

「いよいよアサノハね。」

「うん。どうしようかなー。」

「バベルのことなんだけど、たしか完璧にいらなくなったのはそう昔
のことじゃないのよね？」

「うん。たしか・・・お母さんが子供の頃にはいた気がするって。」

「それじゃあ、街のお年寄りに聞いたら何か分かるんじゃないかし
ら。」

「あ、そうね。」

「私のおばあちゃん、かなりの歳で、頭もしっかりしてるから、よ
かったらウチ寄る？」

「え、ホント？助かるなー。」

だんだん道が明るくなってきた。

思えば、魔力がなくなっただおかげで、こうしてパテラに会えて、パ
テラのアドバイスで道が明るくなったんだ。

きつとうまくいくわ。

バベルにも必ず会える。そんな気がする。

パテラとビリヤードやスロットをして遊んでいると、昼になり、船

が速力をゆるめた。

外には遠く、白い街が見える。

「アサノハよ。キレイな所でしょ。」

白い壁をパステルの屋根が太陽を向いて斜面に整然と建ち並んでいた。

港には多くの迎えが待っている。

「アサノハ。アサノハです。」

港に下りると、パテラが手を振り、パテラの両親がかけよってきた。

「おかえり。」

「ただいま。」

「この娘は？」

「エリーゼです。初めまして。」

「リモーネの列車で会ったの。用があつて、おばあちゃんに話聞きたいんだ。いる？」

「ああ。さつきジョギングから帰ったとこだよ。」

「あ、そう。元気ねー。」

白い階段を昇って、パテラの家案内される。

日差しが熱い。

白いしつくいを塗り直している職人。

高台からは海が見渡せた。

円い葉の白い樹が木陰をつくっている。

「ここよ。」

パテラの家は他の家と同じく真っ白なしつくい壁で、淡い緑と深緑の屋根だった。

庭には白と薄茶のブチの犬がエリーゼを吠えさせている。

「おじやまします。」

「今、レモンティーおもちしますね。おばあちゃんは2階にいますわ。」

パテラの母が荷物をあずかって言う。

パテラと2階に上がると、

「おかえり。早かったね。」

とよく通るダミ声が聞こえた。

声のした部屋に入ると、細い老婆がスクワットを猛烈な勢いでしていた。

「ただいま。こちらエリーゼ。」

「よろしく……」

エリーゼが会釈する。

「おや友達かい？かわいい子だね。」

スクワットをやめて大きな声で話す。

「トーナおばあちゃん、バベルについて知ってる？」

「バベル？あの魔法使いの？」

「うん。エリーゼが用があるの。」

「用？バベルに？」

「ええ。なにかお知りのことがおありだったら、教えていただきたいんです。」

「バベルのこと？」

突然思いもよらぬ質問をされて、トーナは上を向いて考える。

「たしか……私が子供の頃はもう大魔法使いとして有名だったね。あまりいい話は聞かなかったけど……。それで、死んだとか何とかでパツタリ話が止んだね。3、40年前のことだよ。」

「バベルは生きてるらしいわよ。」

パテラは運ばれたレモンティーをかきまわして言う。

「へー、ホントかね。そりゃ驚いた。」

「バベルが……いそうな所とか、心当たりありませんか……？」

「いやー……」

腕を組んでうなり出すトーナ。

3人はレモンティーを考えながら飲む。

道が明るくなるってどういうことかしら。

この近くにいるのか……。それとも何かバベルのヒント

があるの………？

「この街を出ると、おーきな平原がある。」

トーナが手ぶりをして話し出す。

「けどその平原には遊牧民がいるから、バベルがいたらとっくに見つかってるはずさね。」

うなづくパテラとエリーゼ。

「平原を抜けると、山が重なっている。

木がうつそうと茂った森みたいな山が、続いてるのさ。何個も何個も……。」

私はそこまで行ったことがないから、断言はできないが、言い伝えがある。」

真剣な顔でうなづくエリーゼ。

「その山をいくつ越えた奥に、凍る（こお）森^{もり}という山がある。そこは草木も凍る程に寒く、動くものは1つ無い死の世界。入った数少ない人は言葉を失って戻ってくる、といわれている。」

「凍る森の山……。」

「バベルがいると考えられるのは、このあたりではそれぐらいじゃないかね。」

「ありがとうございます。」

「どうするの？」

パテラが聞く。

「行ってみるわ。」

「どうやって！？遠いわよ。それに山を越えないといけないのよ。」

「………魔力が少しだけ戻ってきたような気がしてたの。」

大丈夫だと思う。………。」

「あんたも魔力があるのかい？」

トーナが珍しそうにエリーゼを見る。

「ええ。空を飛べるだけなんですけど。」

「へー。いいねー。私が小さい頃は魔法が使える人は少しだけはいたけど、今となっちゃ珍しいねー。」

なつかしむトーナ。

「あ、じゃあ、寒いそうだから、私のコートかしてあげるわ。」

パテラが自分の部屋から、フサフサの毛皮のついた白いコートと帽子を持ってきてくれる。

街の門に立つ。

風に平原が波を揺らしている。

「バベルに会ったらよろしく言っというて。」

パテラがエリーゼの肩を叩く。

「変なことされないよう気をつけな。」

トーナが握手する。

「じゃあ、行つてきます。」

水色の弱い光がエリーゼを包む。

髪がたゆたつて体が浮く。

「やつぱりまだ本調子じゃないけど、低い所なら大丈夫よね。」

「気をつけてね!」

手をあげて飛び出すエリーゼ。

パテラとトーナは歓声をあげて手を振る。

低く、短い草ギリギリを飛んでいく。

せせらぐ小川に沿って。

川に沿えば山の間を抜けられる、とトーナが教えてくれた。

遠くに茶色いマリユが群れていた。

遊牧民のテントも見える。

ひづめの音がしたので、ふりかえると、足の速い蒼い動物に乗った

老人が追いかけて来ていた。

「どこへ行くんだ!?!」

口に手を添えて大声で聞く。

「凍る森よ。」

速度をゆるめて答える。

「凍る森だって!?!やめといった方がいい。あそこには悪魔がおる。」
バベルのことかしら。

「いいえ。行くわ。心配してくれてありがとう。」

「幸運を祈る。」

手綱をひいて引き返していく。

川は幾重にも重なる山々の間を流れていた。

紅葉の森や、熱帯の森、鳥ばかりいる森や、動物ばかりいる森、その他いろんな森の山を抜けた。

「あつ！」

川に囲まれて1つの大きな山があった。

見ただけで分かった。

凍る森の山だ………。

山を覆う樹々は青く、葉は鋭く雪のように白い。

近くにいるだけで冷気が襲ってきた。

息を飲んで、パテラの白いコートを着こむ。

ゆっくり川岸に下りる。

音は全くしない。

静寂そのもの。

風の音もしない。

耳が痛い程だ。

パテラの帽子は耳まで隠れて好都合だった。

森に足を入れる。

青と銀の地面はシャリツと音をたてて少し沈んだ。

なんて寒い……。

吐く息はダイヤモンドダストのようにキラキラと落ちていく。

コートの上からでも氷に抱かれてるようだ。

「バベルさん……。」

消え入るような小声で呼ぶ。

シャリシャリと地面をふみしめて山に分け入っていく。

パリ。

エリーゼの肩があたった枝が、いともろく折れ、粉々になりなが

ら崩れ落ちた。

手を葉に近づけると、触れるか触れないかのところで、音もなく割れ、氷の粒になって輝いて地面へ降る。

「なんて、……ところなの……。」「

風が吹いたら、何もかも崩れ壊れ、なくなってしまいそう。

早くバベルを見つけないと。

凍死してしまう。

それになんだか……。怖い。

エリーゼが歩いた道が、トンネルのように開いていく。

少し早足で、もうずいぶん歩いた。

上に行くにつれ、樹の幹もだんだん大きく太くなっていく。

もう寒さの限界。

唇は止まらずに震えつづける。

キラリと、青い森の中に金色の小さい光がエリーゼの目に映った。

力をふりしぼって、そちらに歩いてゆく。

それは見慣れないものだった。

初め見ると棺ひつぎのように見えた。

地べたより少し高段の所に、ポツリとそれだけが金色の静かな光を

たたえて置いてある。

宝箱のようにも見える。

「何かしら……。」「

人一人入れる大きさだ。

もしかして、この中にバベルが？

そうだといい。

早くここから出たい。

金色のそれに触れる。

森と同じくらい冷たい。

「バベルさん？」

静かに呼びかけるが、返事はない。

フタを動かそうとするが、ピツタリと重く動かない。

ノックする。

「バベルさん？」

少し大きく呼ぶ。

その声がこだまして、葉が何枚か壊れてチラチラと降ってきた。

「バベルさん！」

ゴンゴンと叩く。

もう何でもいいから出てきて！

夢を見ていた。

短い夢を数え切れぬほど。

まぶたの中はいつも真っ暗だ。

久しぶりに目を開く。

ゴンゴンと叩く音がしたからだ。

外から「バベル！」と叫ぶ女の声がする。

手のひらでフタをゆつくりと押し開く。

「バベル！」

もう何度も呼んだ。

さん付けもやめていた。

「バベル！」

死んじゃう。

寒くてどうしようもなく寒い。

「バベル！バベル！」

ゴンゴン叩く。

これは本当に棺？

死んでしまったの？

「バベル！バベル！バベル！バベル！」

森に壊れた葉が雪のように曲線を描いて降り止まない。

キラキラ、こんな時でも美しく感じる。

泣きそうになって息をついた時、フタが突然音を立てて動いた。

息が止まる。

開いた間から、顔がのぞく。

白い髪、青白い顔、青い眉毛、黄緑の瞳がエリーゼを不思議そうに見る。

中性的な顔で、エリーゼより少し年上ぐらいに見えた。

「あなたは………?」

エリーゼはポカンとして言う。

男は身を起こし、あたりを見回してから言う。

「君は？」

「………エリーゼ。」

「………僕はバベル。」

「バベル………!バベルってあのバベル？」

「バベルなのね？」

「バベルだよ。君は何？」

眉を片方あげてエリーゼを見る。

「それが、………話せば長くて………大事な用があるんです………」

エリーゼは寒くて震えていた。

「待つて、寒いね。おいで。」

上下の服はどちらも真っ青、白い髪は腰まで長きたれさがり、時折、混ざった金色の毛が光る。

箱から、これもまた真っ青のシルクハットを取り出す。

「温室があるから。」

エリーゼは怪しむ気力もなく、ホッとした。

「あ、それと、ここは………」

バベルは腰をかがめて、唇に指をあてる。

秘密の誓いだ。

てんで子供扱い。

エリーゼは少しムツとした。

バベルは構わず、森の奥に歩き出し、エリーゼは後をついていく。

太い樹と樹の間に手をかざすと白い扉が現れた。

「どうぞ。」

ガチャリ。

扉の中には温かい空気、そして夢みたいの花々が咲き乱れ、咲きこぼれていた。

白紫の花穂からは濃厚な香りが立ち昇る。

寒さから逃れて、心底エリーゼはホッとして涙が出そうになった。

バベルは花や葉に触ってから、奥のテーブルについた。

エリーゼにもそばのイスに座るようすすめる。

「さて、ご用件は？」

テーブルにはコーヒーの入った優美なカップが2つ、いつのまにか出現し、湯気を立てていた。

「あ、あの、私、エリーゼといって、アパローゼの町から来ました。」

「いろいろあつて何を話せばいいのか、しどろもどろになってしまいそうだ。」

この世界に大きな変化が生じようとしている長の言葉から、空を飛べなくなつて、長い道程を経て、やっとここまで来たことを長い時間をかけて話した。

話し終わるとバベルはふーんと鼻で言った。

「それは大変だったね。天女が羽衣をなくしたみたいだ。ここを見つけるとは大したものだ。」

その大きな変化というのは、……………おそらく月の怪物のことだね。」

「月の怪物？」

「知らないの？」

エリーゼはうなずく。

バベルは呆れたようにエリーゼを見て、テーブルに焼きたてのクッキーの盛られた皿を出現させた。

「君が魔力を出せなくなつたのは、この世界の魔力の調和が大きく

狂ったせいだ。

月の怪物というのはね、大昔、といっても、600年くらい前だけど、この世界を破滅させそうになった怪物のことなんだ。

まあけど、いろいろ戦ってるうちに、どうにか怪物を魔法の殻に閉じ込めることに成功したんだよ。それが月さ。」

「月？あの月が・・・？」

エリーゼはクッキーを口からこぼす。

「そう。しかし閉じ込めただけで、いなくなったわけじゃない。

その殻をうち破る力をたくわえて、出てくることだって、考えられる。

ちょうど鳥のひながふ化するようにね。

その時が来たということだよ。」

バベルは淡々と話す。

「伝説とか、言い伝えになってないのかな。」

「もしかしてあれかしら。」

「何？」

「悪さばかりする獣がいて、それを見かねた神様が、星の小箱に入れて、海の中に沈めてしまったっていうお話があるわ。」

「ずいぶんロマンチックな物語になったもんだな。」

バベルは吐き捨てるように言った。

「ともかくその凶悪な怪物が目覚めようとしてるのさ。魔力を感じれば分かる。」

「なら大変。助かる方法はないんですか？」

「さあ。戦うしかないんじゃないかな？」

まるで他人事のように言う。

ガッカリした様子のエリーゼを見て、バベルが付け足す。

「しかし、当時は魔力がもつと溢れてて、人々は今よりずっと力があつたっていうから。それを全部合わせて、やっと閉じ込めることができたわけだから。

今の人々ではとても、齒がたたないだろうね。」

全くフロローになってない。

話を変える。

「バベルさんはどれくらい生きてらっしゃるんですか？」

「だいたい、180歳くらいだね。40年眠ってたけど。」

エリーゼはバベルを見て驚く。

180歳といえばエリーゼの10倍以上ある。

「バベルさんは、大魔法使いって、………伝説になつてます。」

「ああそうなんだ……。」

ちつとも嬉しそうな顔ではない。

「よかつたら力をかしてくれませんか？」

このままじゃ、お母さんもお父さんもお兄ちゃんも、みんなみんな………あなただつて死んじゃうかもしれないですよ？」

「嫌だね。力になる気はない。」

「え？」

あまりの冷たい返事に言葉が出ない。

「どうして………？」

「どうしてって、別にどうだっていいから。

助かりたいなら自分らで戦えばいい。

僕はいいや。」

「………。」

「このままじゃ、お金が無くて帰れないんだろ。魔力も消えそうな感じだし、それは治してあげるよ。

そしたら帰りなさい。」

エリーゼはうつむいて黙ったままだ。

「僕は治せないから、知り合いのところに連れてくよ。もう大丈夫だろ？おいで。」

エリーゼは黙ってバベルについていく。

バベルの後ろ姿、白い髪がゆらめく。

少し歩くと大雪原に出た。

バベルは立ち止まり、キョロキョロする。

「そろそろ来るぞ。」

小さな地鳴りが響き始めた。

遠くに雪煙が舞いあがる。

その中心には薄い板のようなものが2枚、こちらに立って滑って来る。

「あれ何!？」

「ハネさ。雪羽氷鱗せつぷいりんっていう大獣だよ。回遊してるんだ。知り合いの所まで連れてってもらおう。」

ハネが近づいてきた。

たしかに巨大なサファイア色の羽が、雪を切り裂いている。

バベルがエリーゼのうでをつかむ。

思わずドキツとする。

手は少し冷たい。

バベルは、雪煙をあげながら目の前を走る羽にすかさずつかまり、根元のあたりに乗る。

エリーゼもバランスをくずしながら乗る。

「久しぶりだな。」

バベルは羽をポンポンたたく。

「すぐ着くよ。引っ越してなければだけど。」

猛スピードでハネは滑ってゆく。

もう空は夕日に明るい。

バベルは行く先をじっと見ている。

風に髪がたゆたう。

バベルに力をかしてもらうにはどうしたらいいのかな。

長様にどう話せばいいの……。

初めて知ることばかりでエリーゼは疲れていた。

「見えてきた。」

バベルが指さす方向に、薄い青色の塔が見えた。

青の屋根に水色のしつくい壁で、六角柱の塔だ。

バベルはまたもエリーゼのうでをつかんで、ハネから飛びおりた。
「バベル！」

塔の方から声がした。

「アンジェラ！」

バベルも笑って呼び返す。

塔の扉が開いて、こつちに一つの影が宙に浮いて滑ってきた。
それは大きなカエルだった。

「魔獣！？」

エリーゼは身がまえる。

「違うよ。古い友人さ。アンジェラっていうんだ。」

アンジェラはバベルの前に降り、2本足で立ってバベルと両手で握手した。

シルクの着物を着ていた。

「久しぶりだなー。元気だった？」

「ああ、ちよつと眠ってた。」

「この子は？」

固まっているエリーゼを見る。

「エリーゼっていう。僕を訪ねてきてくれたんだ。ほら、月の、さ。」

「ああ・・・、あれか。」

アンジェラは目を伏せる。

「まあ入って。」

塔は近くで見ると相当に高く、扉もエリーゼの3倍はあった。

アンジェラが近づくと自動で扉が開く。

中は異様な光景だった。

ふきぬけで、壁という壁、宙に浮く無数の棚に不可思議なものがぎっしりと詰められていた。

そして最も目につくのが鍵だった。

無限にあるのではないかと思えるほど、多くの鍵が壁に渡された糸に吊り下げられていた。

「わぁ……」

「魔力が乱れてるだろ？それで、このエリーゼが空を飛べなくなつて帰れないんだよ。」

「治してくれるか？」

「ああ。ちよつと診せてもらん。」

アンジェラが手招きする。

こわごわ近づく。

いきなりアンジェラが大きな目を見開く。

瞳からプリズムの光線が放たれ、エリーゼの顔を包む。

「ギャー！」

エリーゼはたまらず叫ぶ。

すぐに光線は止んだ。

バベルは笑っていた。

アンジェラも苦笑している。

「まあ、この乱れの影響を受けたんだね。1日あつたら薬できるよ。」

「あ、ありがとうございます……」

顔を赤らめて申し訳なさそうにお辞儀をする。

「疲れたろう？少し休みな。」

バベルが言う。

エリーゼはそばに浮いてた赤い長イスに座る。

バベルとアンジェラもイスに座つて話している。

旧交を暖めているようだ。

しばらく辺りを見回していたが、エリーゼをまるで気にかけていない2人の様子に、しだいに緊張もほどけて、気づいたら眠りに入っていた。

目が覚めると、窓の外はもう暗かった。

「あ、すいません、寝ちゃって……」

アンジェラは細かい実をすりつぶしていた。

バベルの姿はみえない。

「あ、起きた？」

「はい。・・・バベルさんは・・・？」

「久しぶりに空の散歩してくるってさ。」

空を飛べるならアパローゼまで連れて行ってくれたらいいのに・・・

「お腹空かないかな？何か食べようか。」

そういえば空腹だった。

「いただきます。」

アンジェラはテーブルにテーブルクロスをしいてから、近くの鍵を1つとって、虚空にさしこんだ。

空間にドアが現れ、中に入り消えてしまった。

不思議なこともあるものだ。

空を飛べる自分はそうとう珍しいと思っていたけど、こんな世界もあったのね。

アンジェラが出てきた。

遅れて、豪華極まる料理達がぞろぞろとついてきた。

「いただきます。」

どれもこれも、正に魔法の如き美味しさだった。

アンジェラに対する警戒心もはや消えていた。

「月の・・・怪物のことなんですけど。」

食べながら話す。

「うん？」

「本当に本当なんですか？」

「ああ本当だよ。もう人は忘れてしまったみたいだけど。」

「出て来たら・・・」

「破滅だろうね。今度こそ。」

「・・・」

「しょうがないよ。力は歴然の差だもの。」

アンジェラは鳥の丸焼きを一飲みにして言う。

「前は、どうやって閉じ込めたんですか？」

「んー、まず怪物に荒れに荒らされた世界に一人の天使が突然現れたんだよ。」

その天使は、全ての生き物達の魔力を、高めたうえで一気に解き放った。

それでも閉じ込めるのがやっとで、天使はいつのまにかいなくなっ
てしまったんだ。」

「じゃあ今の私達には・・・。」

「とうてい、勝ち目は無いね。そのことがあってから、地上の魔力
はどんどん弱くなっていったんだ。」

バベルは特別さ。」

「バベルさんはどうして力になってくれないの？」

「・・・バベルも疲れちゃったんじゃないかな。」

いろいろあったからね。」

「いろいろって・・・？」

「バベルは力が大きすぎるんだ。人間の身で、どんな魔獣も、過去
の偉大な魔法使いも敵わない、すごい力を持ってるんだ。」

けど、大きすぎる力は、時にはいるだけで人を傷付けてしまうよう
で・・・、初めはバベルがどの国の味方かで、戦争が始まったん
だ。」

「戦争？」

「バベルはどっちの味方でもないし、自由に生きていたかったよう
だけど・・・。」

それから戦争は、バベルを悪にして、バベルを追ったんだ・・・。
ひどいもんだったよ。バベルが立ちよった町が焼き払われたことも
あった・・・。

いっぱい生き物が死んだ。

それでバベルは長い眠りに入ってたんだね。」

アンジェラは悲しそうに話す。

「だからどうかバベルを責めないで。いい奴なんだよ。とっても。」

本当は……。」

アンジェラが涙ぐむ。

「バベルは……戦争でケガをしたの？」

エリーゼが心配そうに聞く。

「そんなバベルじゃないよ。バベルの魔法ったら、それは鮮やかなもんさ。やろうと思えば人間を、……いや、そんな事はしないけど。」

けど、バベルが本気になれば、また怪物を殻に閉じ込めるぐらいきつとできると思うよ！

それくらいスゴいんだ、バベルは。」

アンジェラが胸をはって言う。

「でも、……なんて……言えば……。」

エリーゼが小さく言う。

2人は黙り合う。

アンジェラは水玉模様の鍵を外し、虚空にさしこむと、今度のドアの中には広い浴室があった。

「どうぞ。外からは開かないけど、中からは自由に出入れるから。」

「ありがとう。」

「パジャマはよかったらこれ使って。」

シルクのパジャマが置いてある。

ドアが閉まると音は何もしない。

広い湯船につかって、エリーゼは考えこむ。

どうすればいいの……。

その頃、アンジェラの塔の扉が開いてバベルが入ってきた。

アンジェラは熱いコーヒーをすすめる。

「いい子だね。あの子。」

アンジェラが実をすりつぶしながら、話しかける。

「そう。」

興味を示そうとせず、コーヒーを飲むバベル。

「怪物はいつ頃、出てくるかな。」

バベルが窓の月を見て言う。

「早くて10日、遅くとも1月は過ぎないだろうね。」

アンジェラがゴリゴリとすりつぶして応える。

「バベル、おいら考えたんだけどさ、どうせ終わるなら、最後に全力を出し切ってみて終わるのもいいんじゃないかって……。」

「？」

バベルはアンジェラを見る。

「ほら、バベルは、……抑えてただろ？」

太古に伝わる月の怪物、最後の最後に全力を出す相手が、あの力そのもの、力の神とも畏れられる怪物。バベルだって惜しみなく渾身の力を爆発させられるんじゃないか、……初めて。」

バベルはしばらく黙って、手のひらを見つめる。

「そう、……そうだな。……そうかもしれない。」

バベルの体から炎のように魔力が立ち昇る。

やる気になったようだ。

アンジェラは内心ホッとした。

バベル、このまま終わったら、君が悲しすぎる……。

エリーゼがシルクのパジャマで出て来た。

バベルが話しかける。

「怪物はなんとかするよ。」

「え？」

アンジェラが小さく笑いかける。

どんな魔法を使ったのかしら。

「けど誰のためでもない。自分のためにね。」

アンジェラはエリーゼを寝室に通す。

「ありがとう。」

「いや。ぐっすりおやすみ。」

エリーゼが横になったベッドを、アンジェラが大きな泡で包む。
静かに海の波音がする。

自然と深い眠りに入れた。

「僕も先に眠るよ。」

「ああ。やっぱりあんなに眠っても眠くなるんだね。」

「ああ。まだ寝足りないよ。」

笑い合って、バベルはベッドに横になるが、目は開いていた。
しばらくそうして、ベッドから出る。

アンジェラはまだ本を読んで薬を作りつづけていた。

「あれ。どうしたんだい？」

「アンジェラ。君も協力してくれ。」

「？」

「召喚術で、閉じ込めた時の天使の力を呼び出せるか？」

「ああ．．．．．難しいが、時間があれば．．．．．。」

「僕は力のある知り合いに協力を頼んでくる。」

旧交を確めるついでにね。」

「．．．．．どうする気？」

「やるからには勝つてみたい。」

「勝つ？勝つて．．．．．閉じ込めるのではなくて？．．．
．．．．．。」

「ああ．．．．．。」

「いや、それは、．．．．．だめだ。閉じ込めるだけでいいんだ。そうじゃないと．．．。」

「そんなヘマはしないよ。大丈夫。．．．じゃあおやすみ。」

バベルは寝室に戻る。

それをアンジェラが見つめる。

次の日の昼、バベル、エリーゼ、アンジェラが塔の前に立っていた。

「じゃあ5日後、ここで。」

アンジェラは鍵の束を体に巻きつけている。

「ああ、よろしく。じゃあ行こう。」

バベルがエリーゼに言う。

エリーゼは今朝アンジェラにもらった薬を飲んでから、魔力が戻ってきているのを感じていた。

エリーゼが力を集中すると、水色の光が体を包み、フワリと軽く浮いた。

バベルの体が白く光る。

バベルの背中に真っ白の細く長い羽が現れた。

「羽がはつきり見えるわ。キレイ……………」

「ん？ああ。」

バベルとエリーゼが空高く飛び立つ。

見届けたアンジェラは、鍵を虚空にさしこみ入って消えた。

「これからどうするの？」

飛びながらエリーゼが聞く。

下には山が続く。

「まず、君をアパローゼまで送る。どうせ通り道だからね。それから、古い友人を訪ね飛ぶ。」

バベルの声はよく通る。

「あ！」

平原の上まで来た時、エリーゼが声をあげた。

「ん？」

「私、リモーネに用がある。」

「？ああ、ナイフか。」

「うん。けどお金が無いわ。」

困ってバベルを見る。

「僕も持っていないー。魔法で出すことはできるよ。650クレシだったね。」

「いえ、それはちょっと、ちゃんとしたお金じゃないと……」

うーんと飛びながら考えこむエリーゼ。

「じゃあ僕の宝石をあげるよ。売ったらいくらにはなるだろう。」

バベルは手のひらから色が不思議に乱反射する宝石をいくつか出して、エリーゼに渡す。

「いいの？」

「いいよ。もういらないし、いっぱいもってるから。」

「ありがとう……！」

エリーゼは、この宝石をあげた方が兄は喜ぶかもしれないと思った。

アサノハが見えてきた。

「私、このコートをかしてくれた人に返さないといけないの。」

「あ、そ。じゃあね。」

「ちょっと待ってて。」

バベルの言葉を聞かず、エリーゼは街に下りていく。

バベルはため息をついて空に漂う。

パテラの家の前に着地する。

2階の窓からトーナが手を振っていた。

ノックするとパテラが出てきた。

「ちゃんと会えたわ。いろいろありがとう。コート、ホントーに助かった。」

「そう、本当にいたのね。私も会ってみたいわー。」

「あ、今あそこに……」

空を指さすエリーゼ。

バベルの姿はどこにもない。

「あれ？」

「どこ？」

パテラは眩しそうにキョロキョロする。

「ちょっといなくなっちゃった。ごめん。また今度、きっと会いに来るから。」

エリーゼは急いで飛び出す。

バベルは港の灯台の上にはためく旗の頂点に座っていた。

「こんな所にいた。用はすみました。」

2人は飛び立つ。

バベルの羽が風をなでて空を滑ってゆく。

「本当に、……助かります?」

「さあ、五分五分といったところだろう。」

怪物がどれだけ力があるかどうか見たわけじゃないから。」

「また月に閉じ込めるの?」

「……まだ分からないよ。古い友人達と話してから話。」

遠くに海鳴りがする。

「ここからもう1人で帰れるだろ?」

海の上でバベルが止まって言う。

「え?」

「ちょっと知り合いがこの近くに居るのを思い出した。横道だから、ここで別れよう。」

「……」

ちょっと残念だ。

「私、ついていっても……いい?」

「?どうして?」

「世界を救うヒーローを見てみたいの。自慢できるわ。」

「そんなもんじゃないけど、……別にいいよ。少し危ないところだよ。」

「大丈夫よ。」

嬉しそうに胸をはるエリーゼ。

方向転換して沖に向かう。

「いた、いた。」

遠い島を見てバベルが笑う。

島というより、山が海から突き出している風^{ふう}だった。

山からは煙がもうもうとあがって、その煙の中からもなにか音が響いてくる。

「ドラゴンだわ！」

煙から青いドラゴンが翼をはばたかせ、飛び出してきた。

煙の中から燃えさかる炎が追ってくる。

青いドラゴンは煙の中をにらみつけ、口から青い炎を猛烈に煙の中へ噴きあげる。

それを避けるように、煙の中からもう一匹、赤いドラゴンが飛び出してきた。

2匹は戦い合っているようだ。

「おい！」

バベルが青いドラゴンに近づく。

エリーゼもバベルの後ろに隠れてついていく。

バベルとエリーゼを透明な膜が包む。

熱さがやわらいだ。

「バベル！」

青いドラゴンが戦いながらバベルを見る。

眼下には大きな火口が、鈍く赤く光るマグマを煮え立たせていた。

「久しぶり！相変わらずだな！」

バベルはニコやかに話す。

青いドラゴンが右に左に飛び回りながら、青い炎を吐く。

バベルとエリーゼはそれについていく。

「例の月のことで話があるんだ！」

「んー！？ああ！」

「戦うつもりでいるんだ！君達にも力をかしてほしい！」

「ああ！俺もムシャクシャしてるところだ！いつでも力になるぞ！」

「ありがとう！ムーテヨにも話してくるよ。」

青と赤のドラゴンは絶えず激しく戦いつづけている。
巻き込まれないですんでいるのは、バベルが巧く守ってくれているからだろう。

赤いドラゴンの近くにくる。

「ムーテヨ！久しぶり！」

「おお！バベル！」

ガオーツと青いドラゴンに炎をまきちらしながら応える。

「かくかくしかじかで、力をかしてくれ！」

「ああ！いいとも！カヴァンよりは力になれるぞ！」

「ありがとう！その時にまた！」

海に引き返すバベルとエリーゼ。

後ろでは赤と青のドラゴンが戦いつづけている。

「いつもああなんだ。面白いだろ？」

バベルがクスクス笑う。

エリーゼは力と力のぶつかり合いに目を白黒させていた。

リモーネの街に夜頃ついた。

ネオンがキラびやかにまたたいていた。

バベルは街で一番高い家の屋根の上の風見鶏の上に立っている。

エリーゼは宝石店にいた。

「これはすごい！貴重な宝石だよ。魔力も入ってるようだ。」

主人がバベルの宝石を覗いて興奮している。

「これは650クレシどころじゃない。これとあといくらほしい？」

兄のナイフを返してもらって、エリーゼは少し考える。

「あと、食事できるお金があれば……。あずかってくれてありがとう。」

「本当かい？いやー、もうけたもうけた。」

多めの食事代とナイフを持って店の外に出た。

屋台でいろんな食べ物を買って、バベルに渡す。

屋根の上で2人で食べた。

「へー、美味しい。」

「レストランで食べたならもつと美味しいのよ。」

「これで充分だよ。」

その夜はエリーゼは宿をとって、バベルは空で寝た。

バベルもエリーゼも月を見ていた。

少し大きくなったようだ。

アパローゼの町に飛ぶエリーゼとバベル。

大清湖が見えた。

「ねえ、私の町に寄っていきませんか？」

「嬉しいけど遠慮しとくよ。」

「とつても素敵なところなの。風薫る（かぜかお）町って呼ばれてるのよ。」

「へえ・・・、けどお邪魔だから。」

「どうして？ そんなことないわ。みんなきつと喜ぶ。長様も何かいいアドバイスくださるかも。」

「いや、遠慮しとくよ。」

バベルは遠くを見ている。

羽が日の光を白く受けている。

「・・・アンジェラさんから聞いたけど、・・・

もうバベルさんを恐がる人なんていない。

みんな大歓迎すると思う。」

バベルは悲しそうにほほ笑む。

「いいんだ。僕が自分で1人を選んだんだ。

お願いだから、僕に同情はいらない。」

エリーゼは黙る。

「怪物と戦うのも、自分のためさ。自分の力を全て、試してみたいんだ。

誰かのためになんて・・・無責任だよ。」

「そんな、そんなことない。誰かのために何かができるって素晴らしい

しいことよ。

1人で生きるなんて寂しいだけじゃない。

喜びも分かち合えないなんて。」

「分かったようなこというな！」

バベルが怒りをあらわに怒鳴る。

エリーゼは驚いて黙ってしまふ。

「……もううんざりだ……。。」

エリーゼは下を向いて深く沈んでるようだ。

こんなに人に厳しく、はねつけられたのは初めてのことだった。

ハツと反省したようにバベルが話す。

「悪かった。君の気持ちは嬉しいよ、ありがとう。けど、そういう

気分になれないんだ。」

エリーゼはかすかにうなずく。

「それじゃあ、ここでお別れだ。」

アパローゼの田園がま近に見えるところで2人は止まる。

「お達者で。」

「これからどこへ行くの？」

「パルノンの山に巨人がいるのは知ってるだろ？」

「あの、空を支えてるっていう？」

「ん？ああ、そうそう。そいつに会いに行くんだ。」

「伝説かと思ってた。」

「まあね。じゃあ。」

バベルが手をあげて、飛び去っていく。

エリーゼも手をあげ返すが、バベルはもう小さくなっていた。

「ただいま。」

「エリーゼ！おかえり。……。どうしたの？会えなかったの？」

沈んだエリーゼを見て母親が聞く。

「うっん。会えた。」

「あら、そう・・・疲れたでしょ。長様の所に報告に行つて。おフロわかしておくわ。お腹は？」

「大丈夫・・・・・・・・。」

「エリーゼ、おかえり。バベルは？」

兄が階段を下りてきた。

「・・・・・・・・はい、これ。」

カバンから出したナイフと小さな宝石を兄に渡す。

バベルのをちよるまかした宝石だ。

「バベルの。」

「え！くれるの？すごい！うわー、魔力が入ってる！」

兄は大喜びで、母に見せびらかす。

「じゃあ長様の所に行つてくるね・・・・・・・・。」

出ていくエリーゼ。

心配そうに見る母。

「そうかい。そんなことが・・・・・・・・。」

旅であつたことを一通り話した。

長は厳しい顔でうなずいている。

「だから、怪物はバベルさんたちが何とかしてくれるから、心配ありません。」

「ふむ。」

長は、沈んで小声で話すエリーゼに熱いお茶を入れる。

「わしらにできることは、確かにそれくらいかもしれないね・・・・・・・・。」

「はい・・・・・・・・。」

長はじつとうつむくエリーゼを見る。

「エリーゼはバベルを起こす大きな役目を果たした。ご苦労だったね。」

エリーゼはうなだれたままでコクリとうなずく。

「そういう意味では、バベルはエリーゼに恩があるといえる。」

「え？」

エリーゼは顔をあげて、長を見る。

「エリーゼが起こさなければ、バベルは力を出す機会を寝過ごしてしまったのだから。」

エリーゼはバベルに一花咲かせる、絶好のチャンスを教えてあげたのだよ。」

エリーゼがふんふんとうなずく。

「バベルに今からでも追いつけるかい？」

「え……多分。」

「なら行っておいで。急いで。」

「でも……。」

ためらうエリーゼに長が首をふる。

「恩を返してもらい。お前には最後まで見届ける権利がある。見届けてそれを私に話しておくれ。長の命令さ。モタモタせず急ぐんだ。」

棚に座っていた猫のタレスが頭をふる。

鈴の音が鳴る。

「はい！」

エリーゼは長の家から坂道をかけ下りる。

エリーゼの家の扉を勢いよくあける。

中では母親がスープを作っている。

父が、兄にあげた宝石をのぞいていた。

「あ、おかえりエリーゼ。」

「ごめん、また行ってくる！」

「あ、おい、どこ行くんだ!？」

飛び立つエリーゼ。

父は窓の外にどんどん小さくなるエリーゼをポカンと口を開けて見る。

パルノンの山、トバせば追いつける！

速力を全開にして風を切るエリーゼ。
透明だった羽が、うつすら輪郭を表す。
間に合え！真つすぐ前を見える。

もうすぐパルノンの山。

険しく切りたった山々が空を突く。

風が山にぶつかり唸り声をあげている。

その音に混じって小さく声がした。

耳を澄ますバベル。

「ス．．．．．プ．．．．．。」

徐々に近づいてくるようだ。

「ストーップ！」

ふりむくと山と山の間の点が大きくなってくる。

「バベール！」

「君は．．．どうして．．．。」

バベルの前まで来てハアハアと息を切らすエリーゼ。

「あー．．．追いついた．．．。」

「何だ？忘れ物でもしたのか？」

「違うわ。ハーハー。見に来たの。ハーハー。」

つばをのみこむ。

「何を？巨人を？」

「全てを。最後まで見届けるの。」

バベルの目をキツと見つめるエリーゼ。

「．．．．．まあいいけど。なら初めからそう言えばいいのに。」

「ホント？」

「そりゃ別に君の自由だよ。邪魔さえしなきゃ。」

「足手まといにはならないわ。」

エリーゼはふくれる。

「ただついてくるだけだろ？足手まといにもならないよ。」

「失礼ね。」

「何で？」

エリーゼはおかしくてクスクス笑い出す。

よく分からないといったふうにエリーゼを見るバベル。

「じゃあ行くよ。もうすぐだよ。巨人まで。」

また飛び始める2人。

「空を支えてるなんてスゴイ方に私が会えるなんて。」

「まあ実物を見たらガツカリするもんさ。」

「？」

ひととき大きな山がそびえていた。

裏に回りこむ。

頂の近くの平らな所に下りる。

前には何も無い荒野が広がっている。

「・・・・どこにいるの？」

「手を3回たたくんだ。」

2人は3回手をたたく。

少しすると、前に巨大な、山よりも大きい人の輪郭がボンヤリ現れてきた。

だんだん色が濃くなり、巨人の姿になった。

巨人は両腕を大きく広げ、肩の上に重いものを背負っているようなかっこうをしている。

下を向く顔は苦悶の表情だ。

「すごい。ホントに空を支えてらっしゃる。」

「おい、タイ。」

名を呼ばれて、巨人はチラとバベルを見る。

すると、苦悶の表情はやわらぎ、うでもブラリと下ろしてしまった。

「キャッ、空が崩れるわ。」

「いや、大丈夫だよ。」

バベルの言う通り空にも辺りにも全く変化はなかった。

「やあバベル。ずいぶん久しぶりだ。」

巨人のタイの野太い声が響く。

「まだこんなことやってんのか。」

バベルが言う。

「どういう事………?」

エリーゼが尋ねる。

「ただのポーズなんだ。この子はエリーゼ。」

「よろしく。」

タイがニコやかにあいさつする。

エリーゼはペコリとお辞儀をする。

「ポーズ?」

タイが笑って話す。

「その方が都合がいいんだ。巨人はいるだけで邪魔がられるから。

何かの役に立つてる方が有難がられるからさ。ハハハハハ。」

「そんな……。」

ガツカリするエリーゼ。

後ろで音がした。

見ると、老人がしりもちをついていた。

「な、なんじゃとー。」

震える手で巨人を指さす老人。

「誰だ?」

バベルがタイに聞く。

「時々お参りに来るおじいさんだ。マズいこと聞かれちゃったな。」

「

ポリポリ頭をかくタイ。

憤怒の形相で老人は立ち上がり帰ろうとする。

それを光の檻が包む。

バベルが魔法でつかまえたのだ。

「何するつもり!?」

エリーゼがバベルを見る。

「忘れてもらう。信じてた方がいいこともある。」

バベルは岩のかげに老人を連れて行き見えなくなった。
まさか……。

恐しい想像に息を飲むエリーゼ。

少しすると、岩かげから老人とバベルが出てきた。

老人の体からポカポカ湯気が出ている。

ニコやかにバベルとあいさつして老人は帰っていった。
全てを忘れてるようだ。

「何をしたの？」

「鶏は3歩歩けば忘れるっていうだろ？」

老人はフロに入ったら忘れるんだ。

フロに入ってもらった。」

絶対嘘だ。

何か魔法を使っただんだわ……。

「それはそうとタイ、月の怪物だ。」

「ああ、そのことだね。アンジェラが先日来て話を聞いたよ。」

「どうする？」

「僕もやってみるよ。」

「そうか。」

その後、タイが荒野の巨大な野牛をつかまえて、焼いて三人で食べた。

「そういえば、この前リヴァイアサンの波調はちようを感じたんだ。」

「リヴァイアサンの？」

口をいっぱいにして話す。

「確かにあれは……あっちの方で。」

大きな指で方角をさす。

そっちを向いて、バベルは精神を集中させる。

「ホントだ……リヴァイアサンがついてくれば百

人力だな……。」

「難しいよ、あの人は……。」

「いや、……頼んでみるだけ頼んでみよう。」

巨大な野牛はたちまち骨だけになった。

「リヴァイアサンって？」

タイと別れて、バベルとエリーゼはリヴァイアサンの波調を目指して飛んでいた。

「この世界の最初の大獣さ。全ての大獣はリヴァイアサンから生まれたんだ。」

一説には、この世界ができたと同時に生まれ落ちたといわれている。僕も一回しか会ったことないよ。」

「へえ。……バベルとどっちが強いのか？」

エリーゼはバベルの魔力をつかみきれていなかった。

バベルは笑って首をかしげる。

「うーん、分からないな。とほうもない人だから。」

「バベルはどれくらい強いのか？」

「さあ、……100回死んでも生き返る自信はあるよ。僕の魔力は不滅さ。」

「じゃあバベルは死なないのか？」

「魔力さえ残ってたら。なくなったら死ぬよ。」

もうとつくに死んでる歳だからね。」

「ふーん。死なないでね。怪物と戦っても、力は少し残るのよね？」

「……フフ。そんな無理はしないよ。自分のためだしね。」

バベルは前の話を蒸し返そうとする。

エリーゼは無視して前を向く。

バベルは笑っている。

そろそろ日も落ちかけてきた。

夕暮れが青空に混じって滲む。

「まだずいぶん遠い。今日はここまでだ。」

バベルは止まる。

エリーゼも魔力を使い続けで疲れていたのでホッとする。

「いいとこ教えてあげよう。」

バベルは下を覆っている森を指さす。

上からは見えなかったが、森の中にはところどころに温泉が湧き出ていた。

多種多様な動物たちがつかっている温泉を通りぬけると、崖から滝が落ちていた。

その滝からも湯気が出ている。

温泉の滝だった。

「ここは天然の薬湯くすりゆで、魔力にもいい。

湯治客用の宿もあるし、今夜はここに泊まろう。」

「でも……。」

エリーゼはバベルを見る。

「? ああ、そうか。」

バベルは、あいている温泉のまわりをオーロラのカーテンでとりかこむ。

「これでいいだろ?」

湯治客用の宿は最悪だった。

建物は腐っているし、得体の知れない動物たちが行き来して、匂いもついていた。

「僕は外で寝るわ。」

バベルが顔をしかめて出ていく。

「あ、私も……。」

エリーゼもあわててついていく。

外は肌寒かったが、温泉のせいかいつまでも体はあたたかかった。

バベルは静かに飛び立ち、夜に浮かぶ雲を集めて、その上に横になった。

エリーゼもそれに乗ろうとする。

「こらこら、きゅうくつだよ。」

「じゃあ、わたしのもつくつてよ。」

「あー、じゃまくさい。」

バベルはもう1つ雲のゆりかごを作る。

エリーゼがそれに乗ると、優しく受け止めてくれた。
夜空に2つの小さな雲が浮かぶ。

「バベルは家族はいないの？」

「いたよ。もう亡くなった。」

「やっぱり魔法使いだったの？」

「ああ。まあ並のね。」

「悲しかった？」

「そりゃね。」

「泣いた？」

「子供みたいなこと言うなあ。まあ……………」

魔力がいくら強くても、人を助けられなかったし、生き返らせることもできないことを知ったよ。」

「……………」

「魔法つてのはよく分からないよ。未だに。

何のためにあるのか。……………どう使えばいいのか。

魔力を持つ人はどんどん少なくなってるけど、それでいいのかも知れない。

魔力がなくなったら、僕には何も残らないけど、それでも……………

いや……………どうなんだろう……………」

「うん……………」

「怪物がいなくなったら、その時こそ完璧に地上から魔力は消えるかもしれない。

それで調和が保たれる。」

「……………」

「君はどう思う？」

「……………」

「おい、……………」

エリーゼの雲から小さいいびきが聞こえる。

バベルはため息をついて寝返りをうち、目をつむる。

「どこまで流されてんだ。」

エリーゼは額にあたるものを感じて目を覚ました。

バベルが木の実を投げつけていた。

「ファレ、ここどこ？」

雲から身を起こすと、海の上だった。

「もう昼過ぎだよ。進行方向だから良かったものの。行くぞ。」

ねぼけまなこで、寝ぐせを手で直しながら飛ぶ。

「この近くだ。」

波が陸をけずりつつている。

バベルは真剣な顔であたりを飛ぶ。

エリーゼもあくびをしながら探す。

「あ、あ、あれ………！」

エリーゼがバベルに指でおしえる。

湾をうめつくす程巨大な魚影が、とぐろを巻いて沈んでいるのが見えた。

「リヴァイアサンだ！」

バベルは岸に急降下する。

「こんな浅瀬に……。」

バベルが波打ち際に降り立つと、海がせり上がり、リヴァイアサンが姿を現した。

「待っていたぞ、バベル。」

静かに耳に届くような声だ。

黒曜石のように黒く輝く巨体は、蛇のように長く、その影にバベルもエリーゼもすっぽりと飲み込まれてしまう。

リヴァイアサンの魔力は、いるだけでエリーゼの身をビリビリと震わせた。

「お久しぶりです。リヴァイアサン。」

バベルも緊張しているようだ。

「あの怪物のことだろう？」

リヴァイアサンは金色に鈍く光る目を細めてバベルを見る。

「はい。」

リヴァイアサンはバベルの言葉を待つ。

「私は戦うつもりです。できる限り。」

「そうか。」

リヴァイアサンはゆっくりとうなずいた。

「あなたにも力をかしてほしいのです。」

バベルはリヴァイアサンを黄緑色の瞳で見上げる。

リヴァイアサンはエリーゼを見る。

エリーゼは固まっていた。

「あの怪物が再び現れるのも、またこの世界の行く末かもしれない・
・・。」

リヴァイアサンの体から水がしたたり落ちている。

「しかし・・・。」

バベルはチラとエリーゼを見る。

「しかし、私達は何かをできるかもしれない。」

リヴァイアサンは深い沈黙をつくる。

「そうか・・・。力を持った我々がいることも、世界の1つという
ことか・・・。ならば、バベル力になろう。」

バベルが小さく頭を下げる。

「だが、あの怪物もまた、力を持ったということでは、我々、バベ
ル・・・。同じなのかもしれないな。」

「ええ・・・。そうですね・・・。」

バベルが目を伏せて応える。

リヴァイアサンが海の中に帰ってゆく。

海から声が静かに響く。

「バベル、この世界がどうなるであれ、
・・・。私はお前の未来を祈ってるよ。」

バベルは深く感じ入っているようにも、沈んでるようにも見えた。

エリーゼは急に力が抜けて、ペタリと座りこんだ。

「これでいいだろう。・・・」

バベルが枝をもてあそびながら呟く。

「勝てそう？」

2人はリヴァイアサンがいなくなった渚に座っていた。

首をひねるバベル。

波がとびちる。

「戦う時は安全な所にいるんだよ。・・・アサノハがいいか。あそこは大きな神殿もある。アンジェラも召喚しやすいし、アンジェラのそばにいるんだ。」

「バベルは？」

「どこでもいいよ。」

細い風がバベルの髪をゆらす。

「面白いところがある。行こう。」

バベルが連れて来たところは、広い花畑だった。

花畑といっても、風に揺れて音をたてている花はみな、ドライフラワーだった。

地平線までドライフラワーが咲いている。

空はもう黄昏たそがれだった。

「珍しいだろ？ここの花は枯れ落ちずにドライフラワーになるんだ。そして、雨季が来るとまた生きた花に戻るんだ。」

その時来たら、すごいキレイだけど、・・・僕には今が向いてる・・・」

バベルはふつと悲しそうな目になる。

「私もドライフラワー好き。ほら。」

エリーゼはカバンからドライフラワーのお守りを取り出して見せる。

「へー。」

バベルはそれを受けとり、花畑と重ねる。

「じゃあこれに魔法をかけてあげよう。願ったらいつでも、ここに来れるようになるよ。」

バベルの手からドライフラワーのお守りへ光が移る。

「ありがとう。」

大切そうに受け取るエリーゼ。

「助けてくれてありがとう。……」

「ん？怪物のことかい？違うよ、あれはー」

「ううん。」

エリーゼはバベルの言葉を遮る。

「ありがとう。」

「……」

バベルは照れたようにほほ笑む。

「まるで、……まるであなたは天使だね。」

バベルは笑う。

「……ありがとう。」

バベルは下を向いて言う。

風がドライフラワーの花畑をなでて、バベルとエリーゼを吹き過ぎる。

後ろでガサツと音がして、振り向くと影が素早くエリーゼをかすめる。

「キャツ。」

エリーゼの腕から血が流れる。

血しぶきが口に入って血の味がする。

バベルはとっさにエリーゼをひっぱってかばう。

爪をむき出しにした大きな猫のような魔獣が、血走った目でうなづいていた。

獣がまた襲いかかってくる。

「炎よ！」

バベルの声と同時に、魔獣がすさまじい炎に包まれる。

魔獣は灰も残さずに消えた。

「エリーゼ。大丈夫か。」

エリーゼの腕から血が流れ出している。

「大丈夫。たいしたことないわ。」

「だって血が、・・・ああ。」

バベルはおろおろして、エリーゼの腕をおさえる。

「月と僕の魔力が刺激したんだ。ごめん。治療魔法はできないんだ・
・・・。」

バベルは今にも泣き出しそうな顔で謝る。

「また間違えた・・・・・！！」

バベルは歯をくいしばって宙をにらむ。

「大丈夫。ホントに大丈夫よ。」

エリーゼはカバンから白いハンカチを出して血をぬぐう。
切り傷は大きかったが浅い。

ハンカチを包帯がわりにして巻く。

「アンジェラの塔に行こう。僕が連れてくよ。」

「え？」

バベルの体からまばゆい閃光。

白く細い羽が急に大きくなり、閃光がおさまるとバベルは真っ白い
大きな鳥の姿になっていた。

バベルの髪のように時折、金色が光る。

「乗って。」

エリーゼは乗る。

鳥のひなのように温かい。

鳥になったバベルが羽ばたく。

高く飛び上がって、感じたことのない速さで空が流れ、風を散らす。
あつというまにアパローゼ、リモーネ、アサノハを越えて、アンジ
エラの塔についた。

「すぐ傷の手当てをするよ。」

バベルが棚を荒らして、包帯と薬草をエリーゼの腕に巻く。

「明日の夜にはアンジェラが帰ってくるだろうから、その時ちゃん

と治してもらおう。」

「うん。私気にしてないわ。こんなの平気。バベルが悪いんじゃないわ。」

バベルは後ろを向いて少し首をふる。

「月の観測をしてくる。」

バベルは出ていく。

エリーゼは1人座り、無数の鍵を見上げる。

ウトウトしていると、そばでドアの開く音がした。

見るとアンジェラが出てきたところだった。

ドアのすきまからどこかのジャングルが見える。

アンジェラは自分の数倍はある、長いバッグをひきずっていた。

「あれ、エリーゼじゃないか。どうしてまだいるの？それは？」

アンジェラが不思議そうにエリーゼの包帯を見る。

エリーゼはとつとつとこれまでの話を聞かせる。

話し終え、考えこむアンジェラを見ると、バベルが帰ってきた。

「アンジェラ、早かったね。」

「あ、ああ。もう材料は全てそろえたよ。」

アンジェラはパンパンにふくれたバッグを、やっと肩から外す。

「エリーゼにケガをさせてしまって、治してくれ。」

「ん、ああ、分かった。」

アンジェラが棚から数種の薬草を取り出し、煎じ始める。

「月はあと4日後に破れる。」

バベルが言くと、アンジェラの動きが止まる。

「そんなに早いのか！？急がないと。」

アンジェラが手を早める。

それから3日は大変だった。

アンジェラはいろいろな材料をコトコト煮たり配合したりの他に、アサノハに出かけて、大神殿へ打ち合わせに奔走していた。

エリーゼはアンジェラに言われて、アパローゼの町の皆を安全なアサノハに移動させた。
バベルは1人で精神を集中させるためにと言い置いて、どこかにいなくなってしまった。

そのため、エリーゼはバベルと話す機会があまりないままに、決戦の日の朝をむかえた。
月は地上からでも脈動が見えるほど、怪物が出てくるのが近いことを示している。

アンジェラの塔の前に、アンジェラとエリーゼとバベルが集まった。
「久しぶり。」

エリーゼはバベルに言う。

「ああ、そうだね。」

バベルはピンと張りつめた空気を放って、魔力が研ぎ澄まされた雰囲気だ。

「じゃあ、準備は万端だね。」

バベルの言葉にアンジェラとエリーゼがうなづく。

「アンジェラ、エリーゼをよろしく。僕は高台で怪物を狙ってるよ。」

「ああ。」

アンジェラがバベルをジッと見つめる。

「本当に・・・、やるつもりなんだな？」

アンジェラが重く言う。

「・・・ああ。」

バベルとアンジェラは目と目で話してるようだ。

「じゃあ、行こう。」

アンジェラがエリーゼに言う。

エリーゼはうなづく。

「ちよつと先に行つてて。」

アンジェラが短い首をすくめ、鍵をさしてドアの中に消える。
ドアは薄く開いたまま。

「何だい？忘れ物でもした。」

バベルが笑いかける。

「必ず無事で会いましょうね。また。」

エリーゼが手を差し出す。

バベルは握手する。

「必ず。約束する。」

「その時は私の町に来て。風薫る町って呼ばれてるのよ。」

「ああ。行くよ。」

「私、ホントにあなたが天使だと思う。なにがあっても、私あなたが好きよ。」

「・・・じゃあね。」

手を離す。

エリーゼが手をふってドアの中に消える。

バベルがドアを閉める。

「何話してたんだい？」

アンジェラがニヤついて聞く。

「あっ！またカエルが来た！」

アサノハの子供達が、アンジェラを木の棒で叩く。

「こら、痛い！ホントに痛い！やめろー！」

アンジェラが子供達をけちらす。

それでも子供達はアンジェラに向かってくる。

「怖がられるよりはマシか。・・・」

アンジェラとエリーゼは駆け足で大神殿に向かう。

大神殿の屋外の広場に、大勢の人達が集まっていた。

パテラもパテラの家族も、エリーゼの家族やアパローゼの町の人達もいた。

アンジェラが台の上に立って説明を始める。

「皆さん！これまで話してきたように、今夜月が破れ、怪物が出てきます！」

しかし、ご心配には及びません！私が召喚する天使が、怪物の攻撃をひきつけ、かつ防いでくれます！遠方にいらっしゃる知人の方や、もちろん皆さんにも被害は及びません！

怪物は強力な魔法使いと、勇敢な仲間たちが必ず退治してくれます！皆さんは落ち着いて、パニックを起こさずにいていただければ、今まで以上の平穏な暮らしが約束できます！」

観衆から拍手と喝采がわきあがる。

「ヨッ、カエル！頼むぞ！」

「カワイイ！」

子供達が台の上のアンジェラをひきずり下ろしもみくちやにする。

エリーゼは青い空に白く脈打つ月を見上げる。

夜が来た。

人々はそれまでは酒を飲んだりして騒騒しかったが、徐々におとなしくなっていた。

赤子の泣き声があちこちで響く。

自然と人々は近しい人と手をつなぎ合っていた。

月の鼓動はしだいに速く大きくなってくる。

アンジェラが奥に合図する。

すると、大勢の巫女が手に手香炉を持って出て来て、大神殿の広場の周りをかこむ。

手香炉からは煙が細くたなびいている。

「何？」

エリーゼが、地面に複雑な紋様を描いているアンジェラにそつと聞く。

「特製の召喚用のお香さ。苦勞したよ。

精神を安める薬も入ってる。」

アンジェラはこれまでにない真剣な面持ちだ。

手香炉から流れる煙が、霧のように広場を包んでいく。

アンジェラが呪文を唱え始めた。

紋様に光が巡り始める。

人々は目をつぶり祈っている。

月は今にもはちきれそうに大きく揺れる。

アンジェラが目を見開き、プリズムの光が映る。

紋様を巡る光が急回転する。

煙は大神殿を包み、なお濃くなっていく。

月がまた大きく動く。

アンジェラが聞き慣れない言葉を叫ぶ。

煙が渦を巻き、夜空に高く昇ってゆく。

しだいに煙が輪郭をつくり、それはおぼろげな巨大な天使の姿になった。

見上げて涙する者もいた。

月の中から声がした。

激昂げうこうのような悲鳴のようなつんざく声が。

月が破れた。

まさに卵のように真つ二つに割れた。

言葉を失い、息を止める人々。

破れた月の中から、白く輝く液体が細く流れ落ちる。

海に落ち、沈んでるようだった。

最後の一滴が落ちて、沈黙が訪れる。

誰もこの世界にいなくなったような沈黙。

海面に鋭い2本の白い角が突き出てきた。

それはゆっくりと、その次に白く輝く馬の頭が現れた。

その頭に目はない。

ただ白く輝くだけだ。

ひづめを海の上にのせて、全身を現す。

2本の細く長い角のついた白く輝く巨大な目の無い馬が、暗く動めく波と空の間に立っている。

体は白い輝きのうねりが絶えず動いてからまりあっている。それは力の奔流そのものだった。

怪物の足元から、みるみる流水が広がる。

「化け物だ。」

誰かが呟く。

怪物が上を向いて吠えた。

咆哮は雲にこだまし、空は震え、海は怯え、大地はヒビわれて逃げ出そうとする。

怪物は天使の方に頭を向ける。

アンジェラは汗を滝のように流して天使を維持しているようだ。

怪物が厳かに口を開く。

中も白い。

口に虹色の光が溢れる。

それは重なり合い、真っ白になって大きくなっていく。

人々は自分たちを向くそれを見て死を直感した。

怪物の口から白い光線が放たれる。

天使は両手をかざして身がまえる。

天使が光線を受けとめる。

すさまじいまばゆい光が爆発する。

辺りが真っ白に輝く。

やっと目が開けられるようになると、天使の輪郭はボヤけ、姿をなせていなかった。

怪物がまた口を開いている。

アンジェラのゆがむ顔を細く汗がつつたう。

怪物の口に虹の光が集まり出した時、海から怪物より少し小さいものが流水を飛び散らせ、怪物の体に巻きついた。

リヴァイアサンだった。

リヴァイアサンの体が凍ってゆく。

怪物が身をよじる。

リヴァイアサンが怪物の首にかみつく。

リヴァイアサンの口に光が集まり、怪物の首で爆発する。

怪物が鳴き声をあげる。

リヴァイアサンは海に飛びこむ。

怪物の光線が後を追って海に走る。

海面が白く光り、なくなる。

怪物の首から煙と火花が出ている。

上から赤と青の炎が怪物を襲う。

飛び交う赤と青のドラゴンが怪物に照らされる。

ずいぶん小さく見える。

怪物の体に炎が浴びせられる。

怪物の光線が赤いドラゴンの片羽をなくす。

青いドラゴンの片羽もなくされ、海に落ちる。

怪物がそれを狙って光線を出す。

白く光り見えなくなる。

遠くで波しぶきがあがる。

リヴァイアサンの背に、赤と青のドラゴンがつかまっている。

遠くに見えなくなる。

その頃、山の頂に巨人のタイが立っていた。

手には骨をつないだ巨大な槍を持っている。

大きく体をしならせ、槍を投げる。

空を引き裂いて、槍が怪物に飛ぶ。

うつろな天使に口を開く怪物に、突然槍が刺さる。

貫通して、怪物の体を串刺しにする。

大きく鳴く怪物。

怪物は槍の来た方向に光線を放つ。

それはタイの右腕をなくす。

雲の上でバベルが怪物を見ていた。

バベルは紫と金の服を着ている。

バベルが怪物を見すえ、両手をかざす。

バベルの胸の高さに薄い星空が広がる。

雲が回る。

星が回る。

バベルが口を開く。

「星よ、星よ、流れ星に別れを。」

果てなる力と我をつなげ……！」

バベルの胸を囲む星々と、頭の上に広がる星星が、呼応してまたたく。

バベルの空が消える。

上から星々の光が降ってくる。

バベルが咆哮する。

無数の白い星の光が、バベルの背後を抜けて怪物に飛ぶ。

星は雷の尾をひいて、次々に怪物にぶつかる。

怪物が低く長く吠える。

星の光はぶつかり白い炎をあげる。

白い炎が怪物を包み、見えなくなる。

降る星が止み、白い炎が薄れていく。

怪物は流水の上に肘をついて座っていた。

体はもうチラホラと小さい白い光が輝くだけだ。

なおも天使に口を開く怪物。

アンジェラが力をふりしぼる。

天使は空を飛び、怪物の前にひざをつく。

天使は怪物の顔を手で包む。

次の瞬間、天使が白く輝く光になって怪物と重なる。

2人ともいなくなる。

流水が割れる。

人々は事態を分かって歓声をあげる。

「やったぞ！」

「終わったのね！」

皆、手と手を取り合って喜び合う。

エリーゼも一緒に喜んでいた。

楽団が一斉に明るい音楽を奏で始める。

アンジェラはあお向けに倒れて息を切らしている。

「やったわ、アンジェラ！スゴいわ！」

エリーゼがアンジェラに抱きつく。

「助かったのね！あの魔法スゴイ！バベルでしょ！ねえ！」

アンジェラは手で目をかくして死んだように黙っている。

「アンジェラ？」

エリーゼがアンジェラの手をどける。

アンジェラは嗚咽して泣いていた。

雲の上にバベル。

下に見えるアサノハから歓声がここまで聞こえる。

「エリーゼ、．．．助かってよかった．．．．．」

バベルは一人言を言う。

「君に1つ秘密があるんだ．．．これで終わりじゃない．．．
．．．これから月のかげらが落ちてくる。それには怪物の魔力がついてる。それだけでも、この世界は荒廃しつくす．．．．．
．．．僕が壊すんだ。粉々にしてこの夜空に溶かそう．．．僕しかいないんだ．．．」

バベルは黙る。

「君の町に行く約束は誰かにゆずろう．．．」

風薫る町か、きつと．．．」

バベルは言葉を切つて、月に向かって飛び立つ。

「この時もまた、伝説になって忘れられるかもしれない。

けどエリーゼ、君だけは．．．．．忘れないで。」

言葉が一粒の雪になって、ヒラヒラと風につれて落ちて消えた。

「そんな．．．」

エリーゼはアンジェラから話を聞き出した。

アンジェラはむせび泣いている。

「それじゃあ、バベルは．．．？」

「もう．．．」

アンジェラの顔を涙がとめどなくなつた。

「魔力はもうほとんど……。……バベルが……死んじゃう。……」

アンジェラは顔を手でおおう。

人々の歓声はますます大きく、鳴り止まない。

エリーゼがアンジェラの腕をつかんで、広場のはじに連れていく。

「私を飛ばして！」

「え？」

「速く、私を速く飛ばせるでしょ!？」

「そりゃ、何をするんだ!？」

「天使をつかまえに行くのよ！」

「けど、僕は弓矢みたいに打ち出すしかない。君の力ではコントロールできないから、月にぶつかってしまうよ!」

「あそこに飛ばせて！」

エリーゼは迷わず月の近くの空を指さす。

「早く！」

アンジェラはエリーゼの足下に急いで紋様を描く。

「できた！」

紋様に光が巡る。

「頼む！」

アンジェラが叫ぶ。

紋様が光を放つ。

エリーゼが勢いよく飛び出した。

エリーゼの羽が白く光る。

「バベルー！」

こぼれそうな星空に飛びこむ。

割れた月がどんどん近くなる。

月と星の間に点が見える。

「バベル！！」

バベルは驚いた顔でエリーゼを見る。

バベルにぶつかってエリーゼは止まった。

「エリーゼ！」

エリーゼはバベルにつめよる。

「どうして！？どうしてなの！？」

「どうしてって、……………僕がやるほかないんだ。」

「でも、……………」

エリーゼが必死にバベルを見つめる。

「僕は死なないよ。僕の魔力は不滅だから。」

バベルが笑う。

「また少し眠るだけさ。今度はいい夢見るよ。多分ね。」

エリーゼは首をふる。

「じゃあ私が町につれてくわ。すぐに起こしてあげる。だから、最後までついていて、……………そばにいる。」

月のかけらに向かう2人。

月のかけらは青白く光っている。

「ここに入ってたんだ。きゆうくつだっただろうな。」

破れた口を触ってバベルが言う。

エリーゼとバベルを怪物の魔力が届かない膜が包む。

目の前に雲海が広がっている。

下を流水が覆っている。

月の光を受けて、水色の宝石のようだ。

「キレイね。」

エリーゼが笑って言う。

「うん。こんな景色を前に見たことがあるよ。」

「どこで。」

「どこだったかな。ずっとずっと雪と氷が続いてるんだ。誰もいない。ずっと昔に行ったんだ。」

「ふーん。私も行ってみたい。」

いつのまにかバベルとエリーゼを、別々の膜が包んでいた。
エリーゼはバベルを見る。

「エリーゼ、僕も君が好きだ。君こそ天使だと思っよ。皆の力をつなぐきっかけになったんだから。ありがとう。さよなら……。」

ドンドンと膜を叩くエリーゼ。

エリーゼはアサノハの方へ降りていく。

「バベル。」

エリーゼが泣く。

見えなくなった。

月のかけらをなでるバベル。

「怪物よ。これで終わりだ。僕も行くよ。」

バベルの体が白く光る。

「エリーゼ！」

港におりたエリーゼにアンジェラが駆けよる。

エリーゼは泣きじゃくる。

割れた月が青く光を放ち、散り散りの星になって、夜空に消え入る。神殿からはひととき大きな歓声があがる。

エリーゼは泣き声をあげて泣いた。

遠い遠い海に白い三日月が浮いていた。

その上にはバベルがうつ向けにグッタリとよりかかっていた。

三日月が流木にぶつかり、バベルが転がって流木に移る。

三日月は粉々に崩れ、無数の銀の小鱼になって海の中に散った。

あとには、波がバベルを運ぶ音だけ。

1月後、アパローゼの町の家の2階にエリーゼがいた。

ベッドの枕元にはアンジェラオルゴール。

アンジェラは今やアサノハのマスコットになっていた。

エリーゼはボンヤリその音を聴いている。

ハッと思いついて、ベッドの下からカバンをひっぱり出す。

カバンの中をのぞいて、ドライフラワーのお守りを取り出す。

エリーゼはドライフラワーの花畑に立っていた。
風に揺れて、乾いた音を立てている。

「雨よ！」

声がした。

エリーゼはキョロキョロする。

雨雲がわきおこり、雨がふり出した。

ドライフラワーがみるみる鮮やかな色をとり戻し、水をはじく。
雨があがる。

花の香りが溢れる。

いつかバベルが入れてくれた温室の香りだ。

「水の魔法は得意なんだ。」

声の方をエリーゼは見る。

花の間からアンジェラが顔を出す。

ため息をつくエリーゼ。

「おいおい、ひどいなー。久しぶりなのに。」

「声で分かったけど・・・。」

満開の花の中をアンジェラがかきわけてくる。

「バベルの魔法だね。」

「うん。」

ドライフラワーのお守りを見せる。

しばらく2人で座って、アンジェラの出したアップルティーを飲み
つつ、花畑を眺める。

「バベルの言ってたところ、どこなのかな。」

「うん？」

エリーゼは、月のかけらでバベルの話していた雪と氷の場所の話
をした。

「どこかなあ、・・・・・・それはもしかしたらルタインクかも
しれない。聞いたことがある。最果ての地にそんなところがあるって。」

」

「行ってみたいな。」

「そう？がんばれば行けると思うよ。」

「え？どうやって？」

「情報を集めるのに時間はかかるけど、鍵を作ったら行けるよ。できたら送ってあげる。」

1月後。

エリーゼの部屋の窓に、黒猫が柔らかな毛をすりつけている。

エリーゼが窓を開けると封筒に変わった。

中には新しい鍵が入っていた。

エリーゼはワクワクして鍵を虚空にさしこむ。

ドアが現れた。

開くと極寒の風が吹きつけてくる。

急いでコートと帽子と手袋を2重につけて、入ってゆく。

バベルの言った通り、雪と氷がどこまでも続いている。

「ヒョー、サムー。」

凍る森を思い出すわ。

エリーゼの体を水色の光が包んで、エリーゼが飛び立つ。

この頃、なんだか魔力が強くなってるみたい。

ふきすさぶ風をさけて高く昇る。

目の端に、金色の光が映る。

「あ！」

それはまぎれもなくバベルが眠っていた箱だった。

意識を集中すると、弱弱しいがバベルの波調を感じる。

夢を見ていた。

少しだけ夢を。

バベルは箱の中で目を開く。

外でドンドン叩く音がしたからだ。

「バベル!!」

エリーゼの声がする。

手のひらをフタに押しつける。

出たら何て言おうか。

まず静かにするように、指をエリーゼの唇にあてよう。

フタをゆっくりと押し開く。

エリーゼが目を輝かせて待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1348i/>

BABELL!!

2010年10月21日20時11分発行